



男子校最後の学年として

～卒業おめでとう～

広島工業大学高等学校
教諭 楽市 政彦

はじめに

平成31年3月1日、節目となる第60回目の本校の卒業式が執り行われ、328名が卒業していきました。

彼らの堂々とした姿を見ていると、学年主任として彼らに関わってきた3年間で思い起こされ、ホッと安堵するとともに一抹の寂しさが胸に押し寄せてきました。3年間の高校生活で、大きく成長した彼らのことを、学年主任として振り返ってみたいと思います。

男子校として最後の学年

彼らが入学したのは平成28年4月のことでした。本校では、平成24年度から学校改革を進めており、第1弾の特別進学類型改革により国公立大学の進学者が増加しました。そして、この平成28年度入学生と共に、改革第2弾、3弾、4弾を進めていくことになりました。

男子のみが入学した平成28年度入学生は、右を見ても左を見ても「男」だらけの学校でした。しかし、一つだけ違うことがありました。それは、彼らが入学する1か月前の2月22日に、平成29年度からの男女共学化が発表されていたことです。それは、学校改革第3弾であり、39年ぶりの女子募集再開でもありました。このため彼らは男子校として最後の入学生となったのです。

男子校の工大高を志望して入学してくる彼らに対してどのように接し、教育していくかを考え、3月中には学年会を開き8クラスにも及ぶ学年の受け入れ態勢を整えていきました。学年の目

標は〈社会で通用する人間を育成する〉としました。これは、本校の教育の軸になっています。男子校であれ、共学であれ、高校生活は小学校からの初等中等教育の締めくくりとなります。高校卒業後は進路も多岐にわたり、すぐに、または近い将来社会人として生活をしていかななくてはなりません。これから先、AIなど技術の進歩が加速度的に進むことによって、10～20年後には現在の仕事の約半数がコンピュータ技術によって自動化され、機械に取って代わられるという予測が出されています。そのような世界で生き抜いていくためにも、生徒たちにはより自分の将来を自分で見据え、見えない将来に対してでも歩を進めていける力が求められます。そういった力を醸成するためにも、まずは「子ども」のような考え・状態から「大人」に変わっていくことが必要です。入学直後のまだまだ中学生の雰囲気が残っている彼らを、高校生に育て、そのうえで社会人としての基礎的な力を身につけさせる必要があります。

- 基本的な生活習慣の確立
- 礼儀やマナーを身につける
- 人間関係を築く(リアルコミュニケーション力を身につける)

この3点を高校生活の基本として彼らに伝えていこうと決め入学直後のオリエンテーション合宿から「大人」としての自覚を求めました。

新カリキュラムと3R's+E

また、平成28年度から総合類型において新カリキュラムが始まりました。

学習目標を作成することで基礎力に重点を置き、幅広い類型・コース選択を可能にしました。さらに3年次には広島工業大学への進学に特化した「HITコース」と多彩な学びで幅広い進路を目指す「LAコース」を新設しました。その中で、大きな特徴となったのが学校改革第2弾「3R's +Eシステム」の導入でした。「3R's」とは、英語で

- 読み reading
- 書き writing
- 計算 arithmetic

を意味しますが、いわゆる「読み・書き・そろばん」であり、生きるうえでの基本的な能力です。これに、グローバル社会の21世紀必須ツール、「英語 English」を加えて、現代版の読み・書き・そろばんを教育することにしたのです。特に積み上げていく教科は、途中で躓いてしまうと理解ができなくなってしまいます。そこで、授業を習熟度別にして、躓いたところまで戻って一段ずつ階段を上り、「理解できるようになった」と成功体験を積むことで自己肯定感を育むことができました。さらに、実力が伴えば昇級できる英検・数検・漢検を受検することで、自分の成長が見え、より一層の励みになるシステムを導入しました。たとえ低い検定級であっても頑張った過程とその結果を認めるようにし、更なる向上心を持てるように配慮しました。勉強の苦手な生徒たちがコツコツと取り組み、検定級を合格した時の嬉しそうな顔は素晴らしいものでした。もちろん、このシステムでは教科の先生方の辛



抱強い指導があったの言うまでもありません。わかりやすく教え、励まし、ギリギリまで面倒を見ていただいたことに本当に感謝しています。始まったばかりのシステムですので課題も沢山ありますが、より良いものにしていく決意です。

旧校舎から新校舎へ

学校改革第4弾としては校舎の新築でした。1年次に旧館の取り壊しが始まり、2年次の夏に完成予定でした。プレハブの校舎も建てましたが、1学期の間は教室が足りていませんでした。そこで、私たち男子校最後の学年の総合類型は0号館に入ることになったのです。建物は、他の生徒が使用している校舎群とは離れた、旧実習棟で、昭和の面影が強く残る校舎でした。生徒たちの反応が気にはなりましたが、川岸に現れるヌートリアを見ながら案外過ごしやすそうにしていました。ちょうど14クラスにも及ぶ共学1期生が入学しており、学内の喧騒から離れていたのもよかったのかもしれない。



そして、2学期からは新たに建てられた3号館に入ることになりました。生徒たちは、広くて設備の整った真白い校舎で学校生活を送ることができて喜んでいました。

盛り上がる行事

学年が上がるにつれて新制服の生徒が増えてきましたが、男子校の彼らは体育祭やクラスマッチ、学校祭などの行事を楽しみにし、自分たちで盛り上げ成功させようという思いが高かったように思います。特に3年次における行事では全てにおいて、彼ら自身が高校生活の思い出を刻むように楽しんでいました。これには彼らの人間性の成長をみんなで感じることができ、我々教職員も行事と一緒に楽しんでいました。

高校生活も終わりが近づいてくると、多くの生徒から「工大高に来てよかった」「あつという間の3年間だった」といった声が聞こえてくるようになりました。我々にとっては、嬉しくもあり、そして近づいてくる卒業に寂しさを感じるようになりました。そして、平成31年3月1日に彼らは男子校最後の学年としてこの工大高を卒業していきました。最後のHR、保護者と共にクラス写真を撮影しましたが、今回ほど終了時間が過ぎても長く学校に残った生徒が多かった年はないのではと思うくら

い名残惜しそうにしている姿が印象的でした。

おわりに

入学時から考えると、彼らは人間的に大きく成長しました。それは、本校が目標を一貫して追い求めた結果だと思えます。どうすれば社会で通用する人間になれるのか。今の自分は社会で通用するだろうか。こう言ったことを常に考えさせ、教職員がチームとして関わっていくことが重要だと思えます。そうすることで、少しずつ確実に生徒は成長し、本当の大人に近づいていくものだと思います。

最後になりますが、ここまでこれたのも校長先生をはじめとした先生方、事務室の方々、保護者の方々、彼らに関わってくださった方々の賜物だと思えます。とりわけ、担任の先生方は最後まで生徒を導いてくださりましてありがとうございました。そして、男子校最後の卒業生には、良い思い出をありがとうと伝えたいと思います。

本当に卒業おめでとう!

